

# 有田皿山とキリシタンについての私的考察

鶴 美百合

私のような、黒牟田（クロス✙・ムタ）の住宅に生まれ育ちの新参加者が、このような意義深い史談会の会報に書くのは、思はゆいのですが、日頃、私の言っていることがよく分からないと、聞きますので、この際、書いてみる事にしました。といっても、あれもこれも書きたいものばかりです。

とはいうものの、いざ書くとなると、一体何を書いたらいいのだろうか？と悩んでいるところ、たまたま、図書館で、昭和48年発行の「日本の絵皿」という、本にめぐりあい、そして、ページを開いていくうちに、この1枚の皿の白黒の写真を見つけたときは、思わず、「こいたい！やった！」と思いました。なぜなら、ご存知の方がいるかもしれませんが、実は、私がクロス（十字）・バカ（クレイジー）だからです。私は、絵皿をみると、ん？これは、クロス？と関連づけたりやなのですが、この皿もクロス（十字）が一面に描かれていて、これこそ、クロス・バカからみれば、うれしい皿ですが、一般の人がみれば、ただのクロスのような絵皿の雑器なのかもしれません。今回は、クロス・バカのストーリーです。

さて、私にしてみますと、大胆にもその当時にクロスが描かれている皿とっております。それで、この皿の説明でも、とても珍しいクロスが、有田で焼かれたものとはっきり書いてあるので、ぜひ、皆さまにも、この皿の持ち主の解説を下記に紹介したいと思います。

また、現在、有田皿山とキリシタンが結び付く人は皆無だと思われまふ。はたしてそうだろうか？という疑問が私の最近のテーマで、ささやかに、図書で調べたりしております。しかしながら、現代でも、キリシタン禁制なのか？なかなか、私ひとりでは、わからないことばかりです。もし、なにか、資料等ありましたら、お知らせいただけましたら幸いです。

さて、この皿の説明では、

「このクロスに染付皿は、島原、妙高寺の和尚に頂いた皿であるが、町の道具屋で見つけ、わざわざ私のためにとって置いてくださったものである。もうすまでもなく、島原は昔キリシタン戦争のあったところで、こんな雑器が町屋から出たということだけでも、私にとっては、なつかしいし、有田の窯で禁制になっていたキリシタンのために、こんな絵付けの皿が作られたということを知ったのも嬉しい。

これなど、絵付けとして美術価値があるというのではないが、日本におけるキリスト教文化の上からみれば、貴重な資料と言わざるをえない。ある意味では、日本の文化の歩みの中の生きた資料といわなければならない」

と書かれています。

さて、もう一つ、ちょっと、今度は、もっと、衝撃的なクロスを紹介したいと思います。なんと！！「鍋島染付隠れキリシタン山水図大皿」高さ7.3 cm 直径30 cm 元禄時代(1688～1703年)とあります！！では、早速、解説文をどうぞ！

「鍋島藩窯で十字文の入った大皿が制作されたということは、全く信じられない。然しこの皿は事実を雄弁に物語っている。九州地方の切支丹弾圧を遁れて、この皿を隠しもった信者は下総(千葉県北部)に安住の地を求めた。更にこの皿について、古文書が発見され、数奇な

運命を知る事ができた。左方の屋根下に十字文、網を高くした竿頭に明確な十字文をみることが出来る。これと図様の同じ大皿が先年ドイツで発見されたが十字文はない。鍋島藩窯の十字文大皿として歴史的貴重な作品である」栗田美術館所蔵の本にありました。

さて、鍋島とクリスチャンとは誰もが信じ難い事ですが、たまたま、武雄図書館にあった、肥前キリシタン研究会史をぺらぺらめくっていると、そこには、鍋島勝茂公と鍋島藩窯の事が記されていました。

そこには、平成6年度の鹿島市浜町・国際シンポジウムが開催されたとあります。そこで、その当時、参加者は、鹿島史談会と地区の方々で行きを詰まらせるような思いで聴講されていたとあります。

私も、2年前、浜町を兄との歴史探訪で、町の方にキリシタンの教会はありますか？と聞いたことがあったのですが、酒倉のほとんどの方は、知らないとの事でしたが、詳しい酒蔵のひとがいるからという事できいたところ、やっと、多良街道には、いたるところに、プラス？(+)のキリシタンの遺跡があり、浜町にも教会があると教えてくれました。そして、やっと、たどり着いたのが、若宮神社です。

### 若宮神社（わかみやじんじゃ）

慶長12年、スペインのドミニコ会が肥前で最初の教会を建てており、場所はここ一帯にあったと推定されています。3人のスペイン人宣教師は、キリシタン弾圧までの数年間、この教会を本部にして九州一円で布教活動を行っていたとあります。



何を言いたいのかと申しますと、実は、下記の大矢野先生からのパネルの要約で得た知識を、一年前くらいに有田の史談会で質問したことがあります。それは、

- ・浜町にスペイン船が入港していた。
- ・ドミニコ会の布教本部が浜におかれていた。
- ・佐賀藩は外国から技術を学んだ。
- ・焼き物の歴史、浜一皿山一塩田一不動山との関連。
- ・色鍋島の謎（スペイン船が赤絵の顔料を運んでいた）
- ・400年前、浜は港町として栄えていた。等です。このように書き出すと当時私が質問したのが少しわかってもらえると思われれます。

また川上先生のシンポジウムのテーマも面白いので記述いたします。

- ・浜町は500年前は「有馬の支配にあった。(松岡城の由来)
- ・浜は400年前、長崎と藤津郡とを結ぶ重要な港として栄えていた。
- ・勝茂は宣教師達を信頼し、厚意を寄せ信者も4千人を超えていた。
- ・岡本大八事件を契機としてキリシタン禁教がだされた。

・わずか6-7年の宣教だったがドミニコ会宣教師の献身的な働きが浜の人々に信頼と愛情の心を植え付けた。

岡本神父からは、

- ・鍋島勝茂はメナー神父が学識、教養に優れていることを知り信頼していた。
- ・スペイン船のドノーソ船長が江戸に向かって渡航中、嵐にあつて漂流、ロザリオの聖母に祈って助かり、メナー神父に教会設立の寄付を申し出て浜に教会がたてられた。

アレグリーニ神父からは、

- ・宣教師の心は今も昔も同じだと思う。「地の果てまで行き、私の証人となりなさい」と。
- ・ドミニコ会の宣教師たちは僧侶と仲良くしていた。

等、今では、だれも話題にすることもなくなって、知る人もいないと思われま

す。で、まとまりのないお話しで、申し訳ありません。実際、パネルディスカッションと本の抜粋のオンパレードでしたが、

最後に、アレグリーニ宣教師が、「宣教師達は町の人々から親しまれていた。それは利益を求めず「捨て身のパードレ」と呼ばれるように一心に人々のため、神様につくしたからだと思う。」というのが一番、印象に残る言葉でした。





